

## 大学生による小学生への地域安全マップ作製指導とその効果測定

濱本有希<sup>1</sup>

平 伸二

福山大学大学院人間科学研究科 福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：地域安全マップ，防犯環境設計，割れ窓理論，ソーシャル・キャピタル

地域安全マップは、子ども達自身が体験学習を通して被害防止能力を身に付ける方法であり、全国の教育現場や地域活動の中で盛んに実施されている。特に、広島県では大学生を中心とした指導が積極的に行われ、他の自治体からも派遣要請がなされるなど注目を集めている。本稿では、大学生を指導者とした広島県での地域安全マップ発展の経緯と具体的な方法を紹介した後、地域安全マップで期待されている効果測定の結果について報告する。これらの事例紹介と研究成果が、同様の取り組みを計画している個人や団体の参考となることを期待する。

**地域安全マップとは** 小宮（2005）は、子どもの被害防止能力を向上させる方法として、地域安全マップ作製を提唱している。地域安全マップとは、防犯環境設計(Crime Prevention Through Environmental Design: CPTED)と割れ窓理論(broken windows theory)に基づき、監視性と領域性の視点からコミュニティを点検し、「犯罪が起りやすい場所」と「犯罪が起りにくい場所」を地図にかき出すものである。地域安全マップ作製活動は、事前学習、フィールドワーク、マップ作製、発表会から構成されている。地域安全マップ作製において期待される効果としては、被害防止能力の向上、コミュニケーション能力の向上、地域への愛着心の向上、非行防止能力の向上、大人の防犯意識の向上がある（小宮，2006）。

**地域安全マップ作製指導の経緯** 広島県では、刑法犯件数は減少しているが、不審者情報件数は増加するなど、子どもの安全が危惧される状況であった。そこで、2005年4月、子どもが被害者となる刑法犯認知件数の10%減少と、子どもの安全な環境づくり活動の拡充のため、地域安全マップの県内全域での作製、子どもの安全な環境づくりに取り組む地域活動者の育成・活動の定着を目指し、知事部局、教育委員会、警察本部が共同で、「子どもの犯罪被害防止対策プロジェクトチーム」を設置し、県をあげて子どもの安全な環境づくりに集中的に取り組むこととなった(子どもの犯罪被害防止対策プロジェクトチーム，2006)。このプロジェクトチームは、2年間の期間限定で設置されたもので、現在では広島県県民生活部総務管理局青少年・地域安全室に引き継がれている。

「子どもの犯罪被害防止対策プロジェクトチーム」は、地域安全マップ作製を広く県内に普及させるため、地域安全マップの開発者である立正大学文学部の小宮信夫教授をセミナー講師として、地域や学校でのマップ作製の指導者を養成するセミナーを行った。セミナーには、地域で子どもを見守る活動を行っている人や教職員など多くの人が参加し、小宮教授や研究室の学生の指導により、講義や実習を通して地域安全マップ作製のノウハウを学んだ。広島県では、地域安全マップ作製セミナーを行う際に、広島県内の大学生を指導者として起用し、フィールドワークやマップ作製などのグループ活動時に、グループリーダーとしてサポートできるようにした。2006年10月には、セミナーに学生ボランティアとして参加した学生が中心となり、大学生による地域安全マップ作製の支援を継続・定着させるため、後継者の育成など大学の枠を超えた活動が必要であると考え、学生ボランティアのネットワーク組織「PACE（ペース）」を発足させた。現在、広島県内では、指導者養成のためのセミナーや学生ボランティアの活動などにより、多くの小学校や地域で地域安全マップ作製が行われるようになっている。そこで、地域安全マップ作りの働きかけとともに、正しいマップ作りの理論の普及や指導者の養成、地域の環境改善の取り組みへ繋げていくことなどが必要であると考えられている。

**小学校での地域安全マップ作製指導実施概要** PACE 福山支部では、2005年の8月から2007年10月までに、

<sup>1</sup> 本研究の実施にあたり福山大学人間文化学部心理学科 4年生大崎寛幸さんの協力を得ました。心より感謝の意を表します。

26の小学校において地域安全マップ作製指導を行ってきた。ここでは、小学校の授業の中で1日をかけて実施する例で紹介する。

PACE 福山支部に派遣要請があった場合、対象児童数に応じて派遣メンバーを募り、その中から毎回、各学校担当の代表となる学生を決め、その代表が以降の小学校との打ち合わせを行う。最初の打ち合わせは、資料の揃った福山大学で行うことが多く、代表が図1のような資料を作成し、準備物や1日の授業で行う事例などを紹介して、当日のスケジュールについての話し合いを行う。その後、代表と数名の学生が小学校に下見に行き、フィールドワークで各班が回る地域の区割りを行い、小学校側と講義とマップ作りに使用する部屋や準備物に関する打ち合わせをする。

地域安全マップ作製当日は、学生が開会式の30分前には小学校に到着し、小学校教師との最後の打ち合わせや講義の準備・確認を行う。地域安全マップ作製は、事前学習、フィールドワーク、マップ作り、発表会の順序で実施するが、当日の指導に関しては学生が進行を行い、小学校教師は安全確認や写真の印刷作業などを主に担当してもらう。事前学習では、代表が児童に対して地域安全マップとは何か、犯罪が起りやすい場所や起りにくい場所は、どのような場所なのかについてわかりやすく説明し、最後に確認のクイズを行う。フィールドワークでは、6人から8人で構成された班に、学生リーダーが1名以上付き、表1のような役割分担をさせ、全員が何かの係をすることができるようにする。役割分担ができたら、班ごとに決められた地域を歩き、犯罪が起りやすい場所、起りにくい場所を探す。この時、児童自身が発見できるよう、学生はヒントをだしたり、クイズ形式にしたりなど工夫をして児童の意見を引き出すようにする。フィールドワークから帰った班から、給食が始まるまでの時間に、マップ作りの説明を行う。この時、マップを作る時の役割分担やマップを作る際の約束や注意事項について話す。そして、給食時には、学生リーダーと班の児童と一緒に給食を食べ、地域安全マップの話や学校の話などを行い、さらなる信頼関係の構築を行う。給食をすませた後、実際にマップ作りを行うが、この時学生リーダーは、助言や道具の運搬を行うのみであり、児童が作製しているマップにできるかぎり手をださないようにする。つまり、作製の主導権を学ぶ主体である子どもに委譲するのである。マップが完成したら、発表会を行うが、発表会では作製したマップについて話すのではなく、児童がマップ作りを行ってどのように感じたのかについて発表する。発表が難しい低学年の児童に対しては、事前に発表内容を一緒に考え紙に書かせたり、発表会の際に隣について声かけを行ったりする。発表会が終わったら、代表がまとめの話し合いを行い、地域安全マップ作製が終了する。以上が1日の授業を利用しての方法であるが、午前中のみで実施する場合、休日に小学校や公民館を利用して実施する場合も多い。

なお、地域安全マップの活動を実施する場合、保護者、地域住民、管轄の交番への連絡を行い、活動中の理解や安全確保に関して協力を仰いでいる。

○月○日(○)

〇〇小学校での地域安全マップ作りについて

福山大学 心理学科

【マップ作りの主な流れ】  
 開会→講義→フィールドワーク→マップ作り→給食→マップ作り→発表会  
 8:55 9:00 9:30 11:10 12:20 13:00 15:00

【用意してもらうもの】→ 福山市のセット

①講義  
 ホワイトボードか黒板  
 講義を行う部屋

②フィールドワーク  
 クリップボード(班に2,3個)  
 区分けた地図のコピー(1人1枚)  
 カメラ(デジカメor使い捨て)

③マップ作り  
 学校で用意 模造紙(班に1枚) 色画用紙 折り紙 マジックテープ  
 両面テープ 付せん(ポストイット) シール  
 児童が用意 黒鉛筆 消しゴム はさみ のり 新聞紙  
 あったらしいもの 色鉛筆 クレパス グーピー 修正液 など

福山市の青少年課でレンタルできます。  
 詳しくは… <http://www.city.fukuyama Hiroshima.jp/life/detail.php?hdriKey=1805>

【お願いすること】  
 班の編成 事前に、班を決めておいてください。  
 係の決定 全員が、何か1つの係を行うように係を決めておいてください。  
 (係→班長・副班長・カメラ係・地図係・インタビュー係・メモ係)  
 名札着用 学生は、全員ニックネームの名札をつけています。  
 児童も名前呼びたいと考えているので名札の着用をさせてください。

【学生ボランティアについて】 現在〇名が参加可能

【連絡先】福山大学心理学科 平 伸二先生

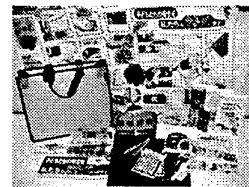


図1. 学生が作製した事前打ち合わせ資料例

表1 地域安全マップ作製における役割分担（小宮，2006を改変）

係	役割
班長	グループのみんなを導くリーダー。街歩きや地図作りの時に、みんなの行動や意見をまとめる役割をする。
副班長	班長の手助けをするサブリーダー。自動車や自転車が近づいてきた時に、班員に知らせて注意させる役割もする。
地図係	街歩きの時に発見した危険な場所と安全な場所やインタビューした場所を、持ってきた地図にかき込む役割をする。
写真係	街歩きの時に発見した危険な場所と安全な場所を写真に撮る役割をする。
インタビュー係	危険な場所と安全な場所を見つけるために、近所の人やお店の人からいろいろな話を聞き、メモをとる役割をする。
メモ係	街歩きの時に発見した危険な場所と安全な場所の理由をメモする。

**先行研究** 平（2007）は、地域安全マップ作製による4つの効果について質問紙を用いて検討している。この研究では、小学4年生30名を対象に、地域安全マップ作製前後に質問紙調査を行うことによって、4つの効果が得られるかどうかを検討している。質問紙は、被害防止能力の向上に関する質問を2項目、コミュニケーション能力の向上に関する質問を3項目、コミュニティへの愛着心の向上に関する質問を8項目、非行防止能力の向上に関する質問を2項目、合計15項目からなるものであった。回答方法は「すごくそう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」の4件法であった。その結果、15項目すべてにおいて望ましい方向へ向上していた。4つの効果ごとの平均値は、実施前に比較して実施後の得点がすべて有意に高くなった。この結果から、小宮（2006）による推測の通り、4つの効果が実際に向上していることが実証された。

**先行研究の問題点** 平（2007）による実験の問題点として、調査が地域安全マップ作製の実施直前と実施直後に行われたことがあげられる。この場合、児童は地域安全マップを行ったことによるバイアスがかかり、実施直後の質問紙調査の方が良い点を入れやすくなってしまふ。また、地域安全マップの効果は持続すると言われているが、持続性については検討されていない。そのため、実施直後の調査だけでなく、実施以後の調査が必要であると考えられる。

**本研究の目的** 本研究では、大学生が小学生を対象として地域安全マップ作製指導を行い、その実施前、実施直後、実施から1ヶ月経過後に質問紙を行うことにより、時間の経過が参加した小学生の被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力の向上に及ぼす影響について検討する。

## 方法

**地域安全マップ作製指導者** 福山大学の心理学科3年生9名（女性6名、男性3名）、4年生2名（女性）。すべての指導者は5回以上の指導経験を持っており、代表としても小学校との調整や講義を1回は経験していた。

**調査対象者** 2006年11月17日に福山市立Z小学校で開催された、地域安全マップ作製に参加していた小学4年生52名に質問紙への回答を求めた。分析対象者は、質問項目に記入漏れがあった8名を除いた44名であり（男子28名、女子16名）、平均年齢は9.6歳（SD=0.5）であった。

**質問紙** 地域安全マップ作製による4つの効果の変動を測定する質問紙は、平（2007）の用いた15項目の質

問紙に加え、地域安全マップ作製指導に携わる人の意見を参考にして24項目の質問紙を作成した(表2)。回答方法は、「すごく思う(4点)」「やや思う(3点)」「あまりそう思わない(2点)」「ぜんぜん思わない(1点)」の4件法とした。

表2 平(2007)の質問項目を参考に作成した質問項目

効果の種類	質問項目
被害防止能力	1.夜1人で外を歩く時、明るい道を選ぶ。 2.どんな場所で犯罪が起こりやすいか分かる。 3.どんな場所が安全な場所か分かる。 4.暗い道をあぶないと思う。 5.人通りが少ない道を1人で歩いているとき危険だと思う。 6.助けを求められる場所がどこにあるか知っている。
コミュニケーション能力	7.話し合いをする時、自分の意見を言える。 8.人の意見を聞くことができる。 9.知らない人にも、親切にすることができる。 10.自分の住んでいる地域の人に進んであいさつをする。 11.自分の住んでいる地域の人と話すことが楽しいと感じる。 12.あいさつをすることは大切なことだと思う。
地域への愛着心	13.自分の住んでいる地域の良いところと言える。 14.自分の住んでいる地域を住みよくしたい。 15.自分の住んでいる地域が好きである。 16.大人になった時、自分の住んでいる地域で暮らしたい。 17.自分の住んでいる地域がじまんでできる。 18.自分の住んでいる地域をきれいにしたい。
非行防止能力	19.自分がされていやなことは人にしない。 20.困っている人がいたら助けてあげたい。 21.物にやつあたりしている人を見たら、いやな気持ちになる。 22.かべに描いてあるラクガキを見たら、いやな気持ちになる。 23.地域の人が困ることはしない。 24.道路にタバコを捨てる人を見たら、いやな気持ちになる。

**地域安全マップ作製方法** はじめに、犯罪が起こりやすい場所と犯罪が起こりにくい場所の判断基準を教えるための事前学習を行った。そして、事前に編成されていた6人から8人の班で、役割分担を決定した(役割は表1を参照)。そして、実際に地域の犯罪が起こりやすい場所と起こりにくい場所を調べるため、フィールドワークを行った。フィールドワークでは、事前学習で学んだポイントを思い出しながら、犯罪が起こりやすい場所と犯罪が起こりにくい場所を確認し、地図上に印をつけるとともにその理由を記し、必要に応じて写真撮影を行った。また、地域の人と出会った場合には、目的を告げてインタビューを行った。小学校へ戻ると、フィールドワークで発見した犯罪が起こりやすい場所と起こりにくい場所の写真やメモを地図上にはりだし、地域安全マップを作製した。すべての班が完成した時点で、班ごとに地域安全マップを前に提示し、調査結果や作業過程において苦労した点や反省点等について1人ずつ報告する発表会をした。タイムスケジュールについては、表3に示した。

表 3 地域安全マップ作製のタイムスケジュール

時間	内容
8:45～9:00	開会
9:00～9:30	事前学習
9:30～11:15	フィールドワーク
11:15～12:15	マップ作りの説明・準備
12:15～13:00	給食
13:00～14:30	マップ作り
14:30～15:00	発表会
15:00～	閉会

手続き 1 回目（実施前）の調査は、地域安全マップ作製の前日に行った。実施場所は児童の教室であり、担任教師が4つの効果の変動を測定する質問紙を机の上に配り、児童はすぐに質問紙に取りかかった。質問紙に記入する際、わからない項目があった場合は、担任教師に質問ができるようにした。その後、記入が終了した児童から質問紙の回収を行った。2 回目（実施後）の調査は、1 回目と同じ内容・手続きで、地域安全マップ作製を行った3日後に行った。3 回目（1ヶ月後）の調査も、1 回目・2 回目の調査と同様の質問紙で、地域安全マップ作製を行った日の31 日後に行った。なお、2 回目と3 回目の調査の間に、地域安全マップに関連した行事などを実施しないように依頼した。図 2 に調査の流れを示す。

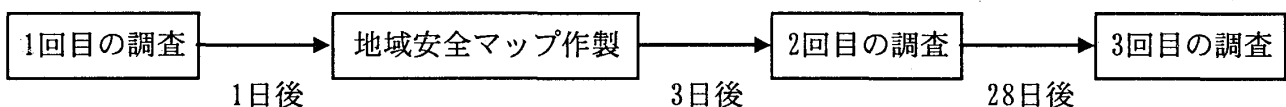


図 2. 地域安全マップ作製指導による効果の持続性の調査の流れ

### 結果

24 項目の質問紙は、被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力の 4 つの効果がそれぞれ 6 項目ずつで構成されていた。この 4 つの効果ごとに平均値を求め、実施前、実施後、実施から 1 ヶ月後の平均得点を図 3 に示した。被害防止能力は、3.3 点、3.6 点、3.7 点、コミュニケーション能力は、3.1 点、3.3 点、3.2 点、地域への愛着心は、3.3 点、3.5 点、3.3 点、非行防止能力は、3.5 点、3.6 点、3.5 点となった。

4 つの効果それぞれに 1 要因 3 水準の分散分析を行った結果、被害防止能力では、時期の効果に有意差が認められた ( $F(2,86)=11.766, p<.01$ )。ライアン法による多重比較を行った結果、実施前—実施後、実施前—1 ヶ月後の間で有意差が認められ ( $p<.01$ )、実施前よりも実施後と 1 ヶ月後の方が危険回避能力の得点は有意に高いことが示された。コミュニケーション能力では、時期による有意な傾向がみられた ( $F(2,86)=2.528, p<.10$ )。ライアン法による多重比較を行った結果、実施前—実施後の間で有意差が認められ ( $p<.05$ )、実施前よりも実施後の方がコミュニケーション能力の得点は有意に高いことが示された。一方、地域への愛着心 ( $F(2,86)=2.199, p>.10$ ) と非行防止能力 ( $F(2,86)=0.279, p>.10$ ) については、有意差が認められなかった。

なお、平(2007)が行っていたように、実施前と実施直後の得点について、 $t$  検定を行ったところ、被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心において有意差が認められ、実施前よりも実施後の方が得点は高くなった ( $p<.01$ )。非行防止能力については、有意差は認められなかった ( $p>.10$ )。

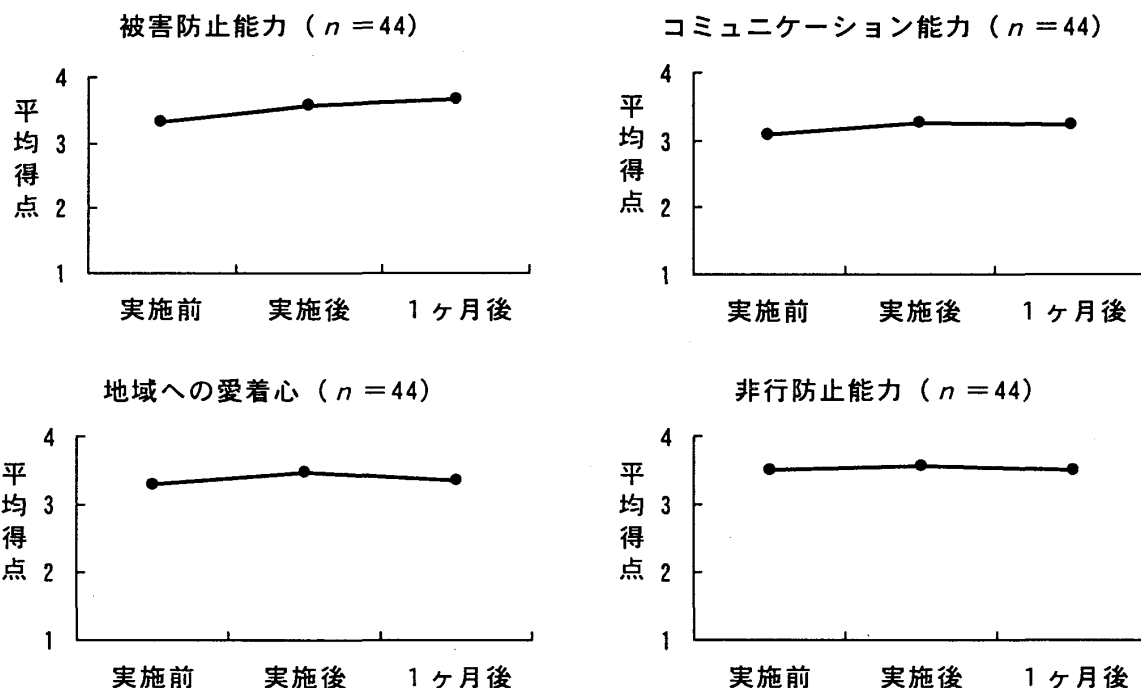


図 3. 地域安全マップ作製の実施前、実施後、1ヶ月後に実施した質問紙の結果

### 考察

本研究では、大学生が小学生を対象として地域安全マップ作製指導を行い、その実施前、実施後、実施から1ヶ月経過後に質問紙を行うことにより、時間の経過が参加した小学生の被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力の向上に及ぼす影響について検討した。

まず、被害防止能力では、実施前よりも実施後と1ヶ月後の方が有意に能力は高くなっていることが示された。さらに、実施後よりも1ヶ月後の方が得点は高く、1ヶ月経過後でも能力は低下せず、持続していることが示された。つまり、地域安全マップ作製によって被害防止能力が向上し、さらに持続するということが検証された。コミュニケーション能力では、実施前よりも実施後の得点が高い傾向が認められた。実施前と1ヶ月後には差は認められず、得点をみると実施後よりも1ヶ月後の方が得点は低くなっており、持続効果は示されなかった。しかし、実施前と実施後の得点についてのt検定では、実施前よりも実施後の方が有意に得点は高く、1ヶ月後まで持続しているわけではないが、地域安全マップ作製によってコミュニケーション能力は向上するということが検証された。地域への愛着心と非行防止能力では、時期の有意差は認められなかった。しかし、地域への愛着心では、実施前よりも実施後の得点の方が有意に高くなっていた。このことから、地域安全マップ作製を行ったことで、自分達の地域を知り、地域の人と関わったことによって、地域への愛着心が一時的に向上したと考えられる。一方、非行防止能力については、実施前と実施後のt検定においても有意差は認められなかった。この結果は、平(2007)の研究結果と一致していない。両研究結果の不一致は、質問紙を行った日の違いが影響していると考えられる。平(2007)の研究では、地域安全マップを作製した同じ日に質問紙を行っているのに対し、本研究は3日経過後に調査を行った。すなわち、本研究では、実施直後に認められる効果が時間経過とともに減衰した可能性が示唆された。さらに、もう1つの可能性として、参加した児童の能力が、実施前の段階で非常に高かったことがあげられる。児童は、地域安全マップを作製すること、大学生が指導者となることについて事前に知らされており、意識の高い状態で事前調査を受けた可能性がある。実際に、4つの効果の中で、実施前の得点が3.5点と最も高く、44人中43人が「ややそう思う」「すごくそう思う」に相当する3点以上の得点であった。つまり、

実施前の高得点による天井効果から、非行防止能力では実施前と実施後に差が認められなかったと考えられる。

地域安全マップ作製では、児童は普段関わることのない大学生と一緒に活動を行うという異年齢交流を行う。石原・本田・利田・戸田・林田(2004)は、このような異学年交流活動によって、児童の「愛着・信頼感」、「モデルの形成」、「自己有用感」が高まるとしている。地域安全マップ作製では、児童が大学生と触れ合うことで、思いやりや尊敬の気持ちといった、相手に対して肯定的な感情や意識が生じると考えられる。これが、児童の精神的な安定に繋がり、愛着や信頼関係が育まれる。そして、愛着を感じている大学生に、尊敬の気持ちを持つことで相手の言葉を好意的に受け止めることができ、モデルが形成されていく。そして、年長の大学生は、児童から肯定的な評価を得ることによって、自己有用感が高まると考えられる。よって、小学校等において、このような異年齢交流を行う機会を積極的に取り入れていくことが望まれる。

ところで、ソーシャル・キャピタル(social capital)とは、社会的な繋がりとそこから生まれる規範・信頼であり、共通の目的に向けて効果的に協調行動へと導く社会組織の特徴とされている(内閣府, 2003)。近年では、ボランティア活動でも、このソーシャル・キャピタルを育てることが重要であると考えられており、実際にボランティア活動の活発な地域では、他の地域と比べて犯罪発生率や失業率が低く、出生率が高い傾向にあると報告されている(内閣府, 2003)。これをソーシャル・キャピタルという概念に着目してみると、ボランティア活動の活性化は、地域社会の人的ネットワークとその社会的な連携力を豊かにする効果を持っており、その地域のソーシャル・キャピタルを向上させた結果、犯罪発生率や失業率の低下に結びついている。地域安全マップ作製においても同様の効果が得られると考えられる。この活動は、担任教師が1人で指導を行うことは難しく、ボランティアの大学生や地域の人、保護者の協力を必要とする。この活動を行うことで、子どもと大人の繋がり、大人同士の繋がりといった、人的ネットワークが広がっていく。このような防犯を端緒にしたまちづくり・人づくりが、地域力を向上させて地域の安心・安全などの側面に好ましい効果をもたらすと考えられる。

本研究においては、実施前後では4つの効果は向上していたが、この効果は時間経過とともに再び減少していた。そこで、4つの効果を持続させるための方法として、地域安全マップ作製後も児童が地域の人や保護者の人に対して発表会を行う、子ども自らが地域の清掃活動に参加するなど、地域安全マップ関連行事を行うことが有効であると考えられる。今後も、地域安全マップ作製指導員の質を向上させるための教育方法の改善や、地域安全マップ作製後に4つの効果を持続させるための有効な関連行事の開発を進めていきたい。

## 引用文献

- 平 伸二 (2007). 地域安全マップの作製とその効果測定 福山大学こころの健康相談室紀要, 1, 35-42.
- 石原利樹・本田千恵・利田亨次・戸田 香・林田正彦 (2004). 社会性の育成を目指した生徒指導の在り方に関する研究—規範意識をはぐくむ異学年交流の活動を通して— 広島県立教育センター 2004年3月  
<<http://www.hiroshima-c.ed.jp/publish/ki/index.html>> (2007年11月27日)
- 子どもの犯罪被害防止対策プロジェクトチーム (2006). 事業の概要 子どもの犯罪被害防止対策プロジェクトチーム 2007年3月31日 (<<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/cspt/gaiyou/torikumi01haikai.htm>> (2007年11月27日)
- 小宮信夫 (2005). 犯罪は「この場所」で起こる 光文社
- 小宮信夫 (2006). 地域安全マップ作製マニュアル(改訂版)—子どもと地域を犯罪から守るために— 東京法令出版
- 内閣府 (2003). ソーシャル・キャピタル:豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて 内閣府 NPO ホームページ 2003年6月19日 <[http://www.npo-homepage.go.jp/pdf/report\\_h14\\_sc/1.pdf](http://www.npo-homepage.go.jp/pdf/report_h14_sc/1.pdf)> (2007年11月27日)

A preliminary Analysis of Effects of Local Safety Mapping Activity by Elementary School Children with the Aid of University Students

Yuki Hamamoto and Shinji Hira

The present study tried to investigate an educational power of a local safety mapping activity by elementary school children to cultivate their abilities to avoid being involved in crimes. A same questionnaire that measures children's abilities to avoid crimes was administered to the children 3 days before and a month after their participation in making the local safety maps. Results showed that the mapping activity improved their crime-avoiding abilities, communication skills, and levels of attachment to the local community. Furthermore, the crime-avoiding abilities were maintained one month after their participation in the mapping activity. These results suggest that the reliability of the educational power of the local safety mapping and it makes children discriminate between dangerous and safety places in their neighborhood. Finally, it was argued that the future crime prevention in local community should be discussed from the stand point of the necessity of "social capital."

**key words:** local safety mapping, crime prevention through environmental design, broken windows theory, social capital

(指導教員：平 伸二)